



去年不貴政常食
今年米賤太傷農
亭主の娘 在詩

竹久夢二略歴

明治 17年 9月16日岡山県邑久郡本庄村に生まれる。本名茂次郎
 32年 神戸中学に入学。12月同校中退
 33年 福岡県速賀郡八幡村大学校光に転籍
 34年 上京
 35年 早稲田実業学校に入学
 38年 『直言』にコマ絵掲載される
 『中学世界』に「筒井筒」が第一賞入選し、投書家時代を終える
 42年 最初の著作『夢二画集・春の巻』発行
 ベストセラーとなり、夢二の抒情画は天下にひろまる
 大正 1年 京都府立図書館において第1回夢二作品展覧会開催
 7年 京都府立図書館において竹久夢二抒情画展覧会開催
 昭和 6年 アメリカ・ヨーロッパへ旅立つ(昭和8年帰国)
 9年 9月1日富士見高原療養所で50歳の生涯を閉じ、有島生馬氏らにより雄司ヶ谷墓地に埋葬される

所蔵作品

立田姫、西海岸の裸婦、砂時計、秋のいこい、一力、こたつ、旅の唄、邪宗渡来、林檎、加茂川、みちゆき、白夜、寒月、ふるさとの笛等、資料含め約3,000点

概況

竹久夢二の里がえりを念じ、松田基(初代館長)が蒐集したコレクションを公開。公益財団法人 両備文化振興財団によって運営されている。
 昭和41(1966)年 岡山市西大寺に夢二郷土美術館を開館
 昭和45(1970)年 現瀬戸内市邑久町本庄の夢二生家を美術館として一般公開
 昭和54(1979)年 夢二生家のある小公園に、アトリエ「少年山荘」を復元
 昭和59(1984)年 現岡山市中区浜に新本館を開館
 平成29(2017)年 本館を水戸岡鋭治氏の監修でリニューアル

夢二郷土美術館 本館



岡山出身で大正浪漫を代表する詩人画家でデザイナーでもある竹久夢二のふるさとにある美術館。竹久夢二の里がえりを念じて作品を蒐集し松田基(初代館長)により昭和41(1966)年に創設された。昭和59(1984)年に夢二生誕100年を記念し、新本館として岡山後楽園そばに開館。
 代表作「立田姫」「西海岸の裸婦」などを含む肉筆作品で随一の所蔵を誇り、年に4回の企画展で常時100点以上を展示。平成29(2017)年に水戸岡鋭治氏の監修でリニューアルし「art café 夢二」で夢二芸術を体感できる。



第6展示室兼ミュージアムショップ&カフェ「art café 夢二」

開館時間 ● 9:00 ~ 17:00 (カフェ営業: 9:00 ~ 16:00、入館は16:30まで)
 休館日 ● 月曜日(祝休日の場合は翌日)、年末年始
 入館料 ● 大人 800円、中高大学生 400円、小学生 300円
 ※20名以上の団体は2割引、岡山県内の65歳以上の方1割引
 駐車場 ● 10台

本館アクセス

路面電車 ● JR岡山駅より東山行「城下」下車徒歩約15分
 バス ● JR岡山駅(1番乗り場)より直行バスまたは後楽園方面行「蓬莱橋・夢二郷土美術館前」下車すぐ
 タクシー ● JR岡山駅より約10分 徒歩 ● 岡山後楽園より徒歩約3分
 車 ● 山陽自動車道岡山ICより約20分



〒703-8256 岡山県岡山市中区浜2丁目1-32
 TEL 086-271-1000 FAX 086-271-1730

夢二生家・少年山荘(夢二郷土美術館 分館)



夢二生家



少年山荘

竹久夢二が16歳までを過ごした茅葺屋根の生家をそのままに保存、少年時代の部屋も公開している。五節句にあわせて肉筆作品を中心に展示。穏やかな自然にかこまれた生家では、夢二芸術の原点を体感できる。

夢二自らの設計により大正13(1924)年に東京府下松沢村松原(現世田谷区松原)に建てたアトリエを、夢二生誕95年を記念し夢二の次男不二彦氏の協力を得てこの地に復元した。「山静かにして太古に似たり。日の長きこと小年の如し」(唐庚の詩「醉眠」)から少年山荘と名づけられた。

開館時間 ● 9:00 ~ 17:00 (入館16:30まで)
 休館日 ● 月曜日(祝休日の場合は翌日)、年末年始
 入館料 ● 大人 500円、中高大学生 250円、小学生 200円
 ※20名以上の団体は2割引、岡山県内の65歳以上の方1割引
 駐車場 ● 10台

夢二生家・少年山荘アクセス

電車 ● JR岡山駅より赤穂線で邑久駅下車、バスまたはタクシーで約10分
 バス ● JR岡山駅10番乗り場より西大寺バスセンター行約40分、西大寺バスセンターより両備バスで北回り牛窓行約30分「夢二生家前」下車
 車 ● ブルーライン邑久ICより約3分



〒701-4214 岡山県瀬戸内市邑久町本庄
 TEL & FAX 0869-22-0622



夢二郷土美術館お庭番「黒の助」

● 友の会「ゆめびい会員」募集中(年間入館バスポート、割引等特典あり)



夢二の里がえり

夢二郷土美術館 創設者 **松田 基**
(1921-1998)

漂泊と抒情の天才画家竹久夢二は、生存中そのロマンと芸術で一世を風靡したばかりでなく、歿後50余年、彼の芸術は年を追って高い評価を受け、その特典で親密な画風は夢二の前に夢二なく、夢二のあとに夢二なしで、不滅の光芒を放っている。

竹久夢二、本名茂次郎、明治17年岡山県邑久郡本庄村の小さな造り酒屋に生れた。梅檀は双葉より芳しというが、3歳ごろからすでに画才の片鱗を覗かせていたという。多感な幼年時代は、ひょうきんでお調子ものであったといわれる。彼が通った明德小学校は数年前統合され廃校になった。

山河は人を育てるという。あの時代、この小さな村が夢二と前後して詩人の正富汪洋、アミノ酸研究で知られる科学者の古武弥四郎博士を輩出していることは興味深い。幼き日の夢二に絵の手ほどきをした服部空三郎先生の作品は、生家ギャラリーに保存されているが、その奔放、雄渾、自在の雅趣と高風は、現代巨匠に比して些かも劣らず一驚に値する。

明治32年16歳で故郷を離れ、叔父を頼って名門神戸中学、のちの神戸一中に入学するが、家業の失敗により一家は当時官営八幡製鉄所につてを求めて九州に移り、一家離散の憂き目にあう。家計を助けるため製鉄所で図面引きなどをし、傍ら独学をつづけ、19歳の春世俗の志を立て、笈を負って上京、早稲田実業に入学したものの、美と芸術に対する志向やみ難く、早熟の天才が頭をもたげ、たまたま当時新思潮の社会主義に走って平民新聞の荒畑寒村のすすめで、日露戦争中反戦の風刺画を埒利彦の「直言」に掲載、同年博文館の「中学世界」の懸賞募集に投書した伊勢物語の「筒井筒」が一等に当選するに及んで学校を中退し、コマ絵かきの青年画家夢二が誕生する。ときに22歳。

岡山では絵かき布衣頭といって、絵かきになることは乞食になることとさげすまれたがコマ絵の賞金、稿料で調子づいた彼は、爾来着々と挿絵画家の地歩を築いてゆくのであった。写真ニュースのなかった当時のこと、早慶野球のスケッチがとりもつ縁で、早稲田鶴巻町絵はがき屋の年上、出戻りの美貌の「たまき」と恋におち結婚したのは24歳のときであった。たまきをモデルに眼の大きい、夢みるような夢二式の美人が生れる。そして20歳台の後半には、すでに押しも押されぬ人気作家として世にもてはやされ、名声をほしいままにするに至る。

かくして、彼のもつ独自の情趣と哀感に絵画を抜け出て同時代の人々の生活にとけこみ、彼の描く日本の心情と甘美なりズムの夢二式美人は人々の心にふれ、新しい時代の女性のイメージとファッションをつくり、驚嘆すべき美と生活の創造者となる。

藤田、竹久、東郷はいずれも明治画壇の重鎮藤島武二門下の逸材で、いずれも武二の「ジ」にあやかリツグジ、ユメジ、セイジと画名を名乗るが、特にユメジの場合、武二と夢二は音訓で「ムニ」に通じることなど余り知られていない。

前京都国立近代美術館長の河北倫明氏は、戦後夢二を日本の近代美術史の中で青木繁、藤島武二の系譜の中で大きく取り上げ、夢二芸術を大胆に照射した人として知られる。夢二の特異な天分を見抜いた藤島は、彼をしてあえて画壇に属さしめず、思うままに独自の天

分を自由に伸ばさせ、そのことが夢二芸術の完成に役立ち、野に在って一世の寵児が出現、夢二芸術の独自性を後世に残すことになる。たまきとの結婚は虹之助、不二彦、草一と3人の子をなしながら、港屋時代を経て2年にして破局を迎える。時に夢二、26歳、離婚後も愛欲のきずな断ち難く、ずるずると世の常ならぬ二人の関係がつづくが、夢二、32歳のとき、かねて相愛の女子美術の画学生であった笠井彦乃と結ばれ、熱烈な恋愛が逃避行となって、大正5年から7年にかけて甘美な同棲生活が京都清水の二寧坂でいとなまれる。その家は如何にも京都らしく、ひっそりと名代のしる粉、おはぎを売る「かさぎ屋」の隣にあって、階下は惜しくも土産物店に改装され昔の面影を留めぬが「竹久夢二寓居の趾」の標柱が訪れる人の足を止めさせている。

先年秋「芸術座」で、たまき、しのとの愛の葛藤を描いた『宵待草』が上演され、片岡孝夫扮する夢二、乙羽信子のたまき、八千草薫のしのの好演技は人々の紅涙を誘った。ときに世間の風は冷たく非情であるといえよう。寄りそった一つの魂が二つに引き裂かれた夢二は号泣狂乱する。そのとき彦乃25歳、すでに胸を病んで再び帰らぬ人となり悲恋の幕はとじられる。山路しのは夢二のつけた彦乃の愛称であることも知っておかねばなるまい。いまわのきわまで肌身離さず夢二の左の手には指環がはめられていたという。その指環の裏側には「ゆめ35、しの25」と横書きの小さな文字が彫まれているが、それは彼自身の悲しき鎮魂の墓碑銘であってもエンゲージリングではない。

永遠なる女性、最愛の人彦乃をこの地上から失って、傷心の夢二は抜けがら同然、文字通り生ける屍となる。

彦乃時代は大正中期にあたるが、詩と歌に思いのべることが多く、一般には画家が後退したといわれる。たしかに彼の詩情と画心は彦乃のため燃焼しつづいたが、野火焼けどもつきずで、その後画作の面では低調から次第に立ち直り、「長崎十二景」「女十題」など一連の名作を大正後期に画き残し、他面その頃から文人画、南画風ともいえる東洋画の境地がひらけてくる。

彦乃の歿後、藤島武二のモデルお葉と同様し名作「黒船屋の女」が描かれるが、モデルを使いながら、いつもモデルを決して描こうとしなかった彼の美人画のマスター・イメージは故郷のやさしき母、髪美しき姉、たまき、彦乃、お葉をひくくめたるめた婿やかなる日本女性の、更にいるならばさだめ悲しく、はかない女のきかであったやもしれぬ。それを業にも似て彼は描きつづけた。

つづいて大正12年大震災による出版界の壊滅は、恩地孝四郎らとともに企画した『どんたく図案社』ならびに雑誌「図案と印刷」の計画を挫折させ、惜しくもグラフィック・デザイナー、イラストレーターの先駆者的役割を中断せしめるが、その頃から次第に蕭条たる晩年の生活と芸術に入り、落款もそれまでの「夢」あるいは「夢二」にかかわって「夢生」が用いられるようになる。一連の後期作品は枯淡の中にも孤愁の沁々とした画境を示し「遠山に寄す」「椋名山賦」「立田姫」「寒月」など数々の名作が多い。

昭和6年、三越で渡米告別展を開き、アメリカに向け出帆、欧米各地を巡り独逸にあってはナチスの台頭を憎み、ユダヤの民に同情、昭和8年台湾に赴き、既にそのころ胸の病進行、正木不如博士に診断を乞い、昭和9年1月信州富士見高原療養所へ入院、同年9月1日、病院の人々に見守られ「ありがと」の一語を残し五十年の生涯を閉じる。病床辞世にいう

日にけ日にけ かつこうの啼く音ききにけり かつこうの啼く音はおほかた哀しと。

一方、女性遍歴は彼のロマンの生涯を華やかに彩るが彼は決していうところのドンファンではない。彼は歌にいう。

なつかしき乙女とばかり思ひしを いつか哀しき戀人となる…………と。

彼は美と恋愛と人生に対し余りにも人間的、余りにも純情であったにすぎぬ。思うに天地自然の中の漂泊、永遠なる女性に対する憧

憬なくしては夢二の芸術は育たなかったであろう。この種の芸術家に倫理の物尺をあてることは間違っているし、決して妥当なことではない。彼のロマンは作品を決していやしめることなく、よく昇華していると思うのは、私のひいき眼であろうか。然も彼の描く女性性は官能的ではないが、柔肌のぬくもりをほのぼのと感じさせる。

彼は「詩を絵で描いた」特異な作家であり、画人としては余りにも詩人であり、詩人にしては余りにも画人でありすぎた。

彼は若き日、社会主義者でもあった。 絵筆折りてゴルキーの手をとらんには あまりにも細きわが腕かな

と、ついに主義者たり得ぬ挫折を歌っているが、彼はマルキストというよりむしろ岡山人気質に共通するヒューマンストで、反骨の気風を蔵しながら庶民を深く愛し、失われてゆく日本の美と人情を求め、亡びゆく過去の情趣と面影を詩に詠い、絵にし、人の哀れと日本の情緒をおびただしい作品に定着させた。もって生れた彼の浪漫精神は人生の甘美と、無限の憂愁と、ついに寂寥たる人生の孤独と感傷を作品に流露させ、即興に数々の名作を生み出したのであった。

清方、深水にあらず、麦僊、松園にあらず、また華岳とは異質異曲の、いふなればしかつめらしくない彼の芸術は、通俗性の故に万人の憧憬を誘い、万人の胸に沁みて、万人が解放し得ぬものを万人にかかわって解放したという夢二評は、先年秋、朝日新聞紙上に連載された「新風土記「岡山・夢二編」の森本哲郎記者の流麗なる文章の指摘の数々と共に鋭いと思う。

彼は美神の恩寵を享けながら流離流転、愛別離苦、人の子の運命を享受し、全生命を芸術とロマンに燃焼させてその時代を生きたが、その生きざま、死にざまにおいて、果たして彼が人生の勝者であったか、はたまた敗者であったかということは容易に断じ難い。

「この道や ゆく人なくて 秋の暮」とは芭蕉、西行のみならず、けだし天才的漂泊者の感慨であろう。

彼は現代の歌麿と呼ばれ、日本のロートレック、ムンクとも称讃されている。五月節句童子の画識に「日本男子は泣きませぬ 泣くのは涙ばかりです」と詠いこんだ彼は、社会主義の洗礼をうけたるものの現下みられる如き反権力、反政府、為にする国家不在のイデオロギストではない。「日本に生れてここにあり」と言い切った彼の気骨、既成画壇に反逆して「芸術家はもう沢山だ」と言い切った気概、一見軟弱にみえて内に秘めた稜々たる一片の赤心に、私は彼の日本人としてのバックボーンをみる。

花のお江戸ちゃ夢二と呼ばれ 故郷へ帰ればへのへの茂次郎

これは彼のざれ歌であるが、歿後36年、故郷を離れて70年ぶりに彼の漂泊の魂がすがりつきたいほど懐かしいといった生れ故郷の山河に里帰りした。

竹藪を背にした生家の入口には、生涯を通じての最もよき理解者であった今は亡き有島生馬の碑文「竹久夢二ここに生る」が、あたかも彼の分身である如くに建てられ、有縁の人々を彼の生家に招き入れる。

昭和58年9月16日、彼の生誕100年を記念して建設された岡山市浜の本館、そして昌久町本庄の生家——分館ギャラリーには、数多くの名作、資料が集められ、老若男女、全国各地の熱心なファンの訪れがあとをたたない。

山河は人を育て、人は芸術を創るという。風土的発想を以てするなら、古代から文化の幸ある吉備の国のたつずまいは雲烟やさしく、文学的にして親密だ。画聖雪舟、玉堂を生んだ吉備の系譜の中、夢二も亦不朽の名を留めんとしている。夢二以て冥すべきか。

明治はおろか大正も遠くなりつつある。歴史は繰り返すというが、突出経済のゆきすぎの中で置き忘れた「美しい日本の私」を求めて、人々は漸くその処に帰らんとしつつあるのかどうか。しかして心ひそかに夢二の里がえりを念じる広範な人々の期待を誓願し、企業が夢二の里がえりに貢献し得たことは、一実業人として果報なことといわねばなるまい。

(昭和59年記)

WELCOME TO THE YUMEJI ART MUSEUM

Dear Visitors:

Yumeji Takehisa was born on the 16th of September, 1884 (the 17th year of Meiji) in the village of Honjo of Oku County in Okayama Prefecture. Gifted with remarkable artistic talent, Yumeji was an outstanding figure over a long period from the late Meiji era, through the Taisho period and into the early years of Showa. Through this important time for Japanese artists, Yumeji devoted his whole energy to the creation of beauty until his death on September 1, 1934 (Showa 9) at the Fujimi Highlands Sanatorium brought an end to his 50 years of romanticism and bohemian lifestyle. Yumeji is buried in the Zoshigaya cemetery in Tokyo where on his tombstone, visitors may admire the simple yet elegant epitaph engraved in the brush-strokes of Ikuma Arishima, one of Yumeji's closest friends: "Yumeji Takehisa is buried here." At the annual memorial service for Yumeji held at Zoshigaya, there is still no lack of votaries who come to pay their respects with offerings of flowers and incense.

Mountains and rivers, it is said, bring life to human beings who, in turn, create art. As a local artist, Yumeji is one of a long line of gifted artists who have called Kibi (the ancient name for Okayama) their home. The ancient cultural tradition of Kibi is proud of such names as Sesshu and Gyokudo, and, like them, Yumeji will be revered by our ancestors.

In recent years, the works and life of Yumeji have enjoyed a new revival and critical acclaim; for his art has strong roots in the popular — one might say "national" — taste and sense of Japan. When Yumeji declared, "Enough of Artists!" and, "I was born in Japan, and here I am," he was turning art away from the intellectual elite and making it available to all Japanese. He celebrated the humor and pathos of the common people, and his works set the standard for beauty, lifestyles and fashion of his times. This unique spirit of the art of Yumeji — he had no forerunners nor did a "Yumeji School" develop in the strict sense of the word — has led many to call him Japan's Toulouse — Lautrec or Munch, and the Utamaro of our time. He will continue to shine as the artist who fully developed the fin-de-siecle Art Nouveau movement in Japan.

The Yumeji Museum in his Home Region was built by the Ryobi-Teien Foundation across the Asahi River from Okayama's famed Korakuen Garden, one of the three most beautiful traditional gardens in Japan, to commemorate the centennial of Yumeji's birth. The museum's mission is not only to display Yumeji's artistic achievements in his home region, but also, we hope, to promote historical research on the Taisho Era — that brief interval of freedom and self-expression between those fateful wars of Meiji on the one hand, and that reckless war of Showa on the other hand. Coming at the turn-of-the century, the Taisho Era is often forgotten for its formative influence on our present postwar democracy.

Yumeji Art Museum Founder
Motoi Matsuda
(1921-1998)